Shiga Museum of Art
PRESS RELEASE　2022.9.14

Shiga Museum of Art
滋賀県立美術館

提供年月日:令和4年(2022年)9月14日
所　属　名:滋賀県立美術館
担当者名:福山(広報担当)、三宅
連　絡　先:077-543-2111
E-mail:museum@pref.shiga.lg.jp

滋賀県立美術館　企画展

「石と植物」

2022年9月23日(金・祝)～11月20日(日)

岡田修二《水辺 15》2001年/油彩、キャンバス/滋賀県立美術館蔵

［見どころ］ ＊当館のコレクションを中心に、絵画、版画、彫刻、写真、刺繍、工芸、映像など多様なジャンルから約90点、42組の作家の作品をご紹介（※会期中に一部展示替えを行います）

＊ゲストアーティストとして、信楽の陶芸家として知られる神山清子と、注目の若手作家である松延総司(1988年生まれ)と東加奈子(1991年生まれ)を迎える

＊屋外彫刻を改めて紹介するなど、美術館の室内だけにとどまらないスケールを持って展覧会を展開する

＊一部の作品では、滋賀県立琵琶湖博物館の協力により、素材そのものについてのより詳しい解説も用意

＊関連イベントとして、ロビーコンサートを実施。10月8日(土)「北村朋幹×ジョン・ケージ」(びわ湖ホール連携企画)、10月10日(月・祝)「西岡まり子×深田瑞穂」(平和堂財団芸術奨励賞受賞者)

1. 本展について

石と植物。どちらも私たちにとって自然で身近なものです。だからでしょう、この 2 つは、芸術において、重要な素材でありモチーフであり続けてきました。

本展では、この石と植物に着目します。素材やモチーフという基礎的な観点から始めて、風景や自然、そして島や星へと展開することで、芸術だけでなく、私たちの日々の営みやそれを取り巻く環境へと視野を広げてゆきます。

出品作品は、当館のコレクションを中心に、絵画、版画、彫刻、写真、刺繍、工芸、映像など多様なジャンル、約 90 点。合計 42 組となる作家の中には、信楽の陶芸家として知られる神山清子と、松延総司(1988 年生まれ)と東加奈子(1991 年生まれ)という注目の若手が、ゲスト・アーティストとして含まれています。また、一部の作品では、滋賀県立琵琶湖博物館の協力により、素材そのものについてのより詳しい解説も用意しました。

フランスの哲学者ロジェ・カイヨワは「石が、いや石だけでなく、木の根、貝殻、翼のような造化の妙のすべてが、このように憶測することしかできないこの普遍的な美の比例と法則についての観念を与えてくれる。」(＊)と言っていました。この展覧会を見た後では、石と植物についての、つまり私たちをとりまく環境についての観念が、少し変わってくるかもしれません。

＊「石の中のイメージ」『石が書く』、ロジェ・カイヨワ、岡谷公二訳、新潮社、P.9、9-11

2. 開催概要

展覧会名:企画展「石と植物」
会　　期:2022 年 9 月 23 日(金・祝)～11 月 20 日(日)
休 館 日:毎週月曜日(ただし 10 月 10 日(月)は開館)、10 月 11 日(火)
開館時間:9:30～17:00(入館は 16:30 まで)
会　　場:滋賀県立美術館　展示室3ほか
観 覧 料:一般 950 円(800 円)
　　高校・大学生 600 円(500 円)
　　小学生・中学生 400 円(300 円)
　　※(　)内は 20 名以上の団体料金
　　※展示室1・2で同時開催している常設展も観覧可
　　※未就学児は無料
　　※身体障害者手帳、精神障害者保健福祉手帳、療育手帳をお持ちの方は無料
主　　催:滋賀県立美術館
協　　力:滋賀県立琵琶湖博物館
後　　援:エフエム京都
企　　画:三宅敦大(滋賀県立美術館 学芸員)

■注意事項
新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、関連のガイドラインも踏まえ、必要な対策を講じてまいります。それに伴い、急な御案内の変更などが生じてくる可能性があります。詳細は、当館ホームページ(https://www.shigamuseum.jp/)を御確認ください。

3. 展覧会の構成

第１章「素材とモチーフ」

コンスタンティン・ブランクーシ
《「世界の始まり」　大理石》1920 年

フランスの彫刻家コンスタンティン・ブランクーシは、自身の彫刻を大理石や木材、金属など様々な素材で制作しました。彼は作品ごとに素材を変えるのではなく、同じフォルムの作品を異なる素材で制作して比較し、その素材の持つ独特な表情や、色合いによる印象や見え方の変化を模索していました。また、ケネス・ノーランドの《カドミウム・レイディアンス》など、油彩画に用いられる油絵具にはカドミウムなどの鉱物の粉が用いられているものもあります。他にも日本画に用いられる岩絵具も鉱石などの石を砕いて作られたものです。

また、モチーフという点について、冨田溪仙の《牡丹図》や、加納凌雲の《菊図》などにみるように、草花は芸術において主要なモチーフとして、西洋を問わず、描かれてきました。そして、猪田青以は《流れ》にて川の流れとそれによって揺らぐ川底の石たちを岩絵具などによって描いています。ここでは、砕かれ、素材となった石がもう一度画面の中でモチーフとして石のイメージを成しています。

この章では、様々な形で芸術を支えてきた素材として、あるいはモチーフしての石と植物について紹介します。

冨田溪仙《牡丹図》1928 年

第２章「風景と営み」

土田麦僊《まくわ瓜図　画稿》制作年不詳

石や植物を描くということは、時に風景やその細部を描くことにつながります。野添平米の《石楠花図》や土田麦僊の《まくわ瓜図　画稿》はその一例と言えるでしょう。風景の中には、山々を覆う木々などの植物をはじめとし、岩山や川辺の石たちも含まれています。

そうして風景を構成する要素へと目を向けると黒田重太郎の《薮の中の説法場》のように、私たちの生活の中には地蔵などの石像のように加工された石や植物もまた溢れています。

幸野楳嶺《松茸図》（部分）
制作年不詳

また、神山清子の陶芸や、杉田静山の竹細工などの工芸作品は、様々な石類の粒子からなる粘土や、竹など植物の繊維によって構成された作品です。これらの素材は、土地の文化や植生、土壌などの条件に大きく関わっています。つまりは、作品のために素材が選ばれているのではなく、営みとそれを取り巻く環境の中で、必然的にそれらの素材が選択されているのです。

他にも、幸野楳嶺の《松茸図》や塔本シスコの《永源寺の柿》のように、野菜や果物も土地柄や、食文化や季節など、私たちの営みとの密接な関わりを持つものであると言えるでしょう。

この章では、風景画から私たちの生活の中へ、そしてその中で用いられる工芸品などを通して身近なところにあるそれらの在り方と、それらを見つめる作家の眼差しに着目します。

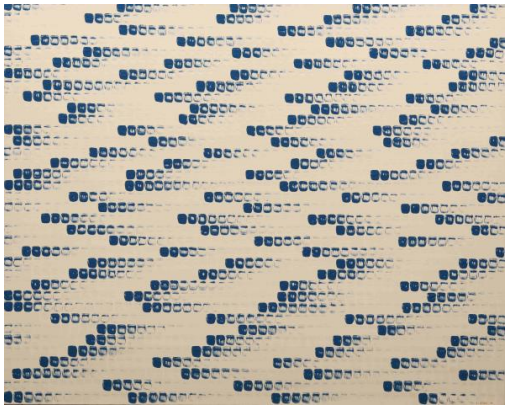
第３章「詩情と抽象」

李禹煥の《点より》は岩絵具により連続する点がキャンバスに描かれています。これは岩絵具とキャンバス（これも麻布ですから、植物によるものです）という ２ つの素材の非常にシンプルな関係を通して、それぞれの存在についてあらためて考えさせます。同作のオマージュとして小沢剛が制作した《醤油画（李禹煥）》は、タイトルの通り岩絵具を醤油（これも植物由来の素材と言えるでしょうか）に置き換えたものです。

また、井田照一の《石と紙と石》は一枚の紙の表面に石のイメージが、裏面には石を用いた版画技法であるリトグラフによる色面が刷られています。石に関わる具象的な要素と抽象的な要素が紙を挟む形になっている同作は、そのタイトルの通り、石と紙と石という構造になっています。

また、東加奈子の《The Voice of Each Body》は地層や石などその場所や大地に刻まれた記憶の声に耳を傾けようとした作品です。そして《Eternal beloved》では、私たちの文化に密接に関わっている蘭に着目し、その品種改良の過程や、蘭にまつわる研究や書籍などを参照しながら、人間と植物の関係について考察をしています。

この章では、こうした作品を通して、石や植物そのものではなく、そうした存在の中にある詩情（ポエジー）や、石や植物が抽象化された先に生まれる表現について取り上げます。



李禹煥《点より》1976 年

第４章「トランススケール」

酒井栄一の《岩はだ》や、岡田修二の《水辺 15》などは、石の表面や、植物の芽、葉のような細部にフォーカスし、それを拡大して表現に取り入れています。一方で田中孝の《Tree》は木という非常に大きな存在を縮小して描いています。

普段とは異なるスケールで対象を見つめることは、それらについての異なる印象や新しい視座を与えてくれます。また、これらの作品は、普段とは異なる視点を体験することを通して、私たちの想像力を刺激します。

松延総司の《私の石》はセメントによって作られた石の作品です。それらは美術館周りの小石に紛れているものと、会場内の各所に配置された大きなものがあります。この2種の石たちは、どちらが石なのか、あるいは石とは何かを問いかけます。

また、車季南の《Flowing》は、麻を合成樹脂で加工した巨大な作品ですが、この作品もまた、大きな布の塊が立ち上がる姿によって、布が持つ柔らかなイメージとは違うあり方に気付かせてくれます。

この章では、こうした対象のスケールを変化させるような表現を通して、石や植物の見方を問い直します。

田中孝《Tree》1977 年

第5章「島と星」

茨木杉風の《沖の白石》は琵琶湖に浮かぶ白石とよばれる岩のある風景を描いたものです。これは白石と呼ばれていますが、実際には湖底から立ち上がる非常に大きな岩の一角で、言い換えるならば大地の延長線上にあるものと言えます。

私たちは道端に転がる小石を石と呼び、一方で先の白石

岸竹堂《四季之月図》明治１０年代（１８７７-１８８６年）

の例や巨大な隕石もまた石と名づけてきました。そうして少し引いてこの世界を見てみるならば、この島や星もまた一つの石なのかもしれません。
この章では、野村仁のアナレンマのシリーズや、岸竹堂の《四季之月図》など天体にフォーカスした作品や、クリスト＆ジャンヌ＝クロードの《包囲された島》のように島を中心に展開した作品を紹介します。
私たちの生きる島やこの星はその表面を植物に覆われている稀有な星であると言えるでしょう。それはつまり私たちの生きる場所が、まさに石と植物によって成り立っているということです。こうした当たり前のことに立ち返ることで、改めて私たちと石と植物、そしてそれらを取り巻く環境について見つめていきます。

最後に―屋外彫刻への誘い―

展覧会を見終えて、美術館を後にするとき、ぜひ館の前の道を右手へと進んでみてください。少し行くと、左手に山口牧生の《夏至の日のランドマーク》と植松奎二の《置・傾／トライアングル》という石を用いた 2 つの作品があります。公園の自然に囲まれたこの2作品は、館内で、様々な自然の脅威や変化から守られている作品たちとは違い、日々環境の移り変わりとともに変化し、異なる表情を見せてくれます。
本展のこのエンディングが、会場での体験と、皆さんの日常との緩やかな橋渡しとなれば幸いです。

4. 出品作家

東加奈子、井田照一、猪田青以、茨木杉風、岩下哲士、植松奎二、江馬天江、岡田修二、小沢剛、
小幡正雄、加納光於、加納凌雲、岸竹堂、木下恵介、クリスト＆ジャンヌ=クロード、黒田重太郎、
幸野楳嶺、神山清子、酒井栄一、菅井汲、杉田静山、関根伸夫、田中孝、車季南、土田麦僊、
塔本シスコ、冨田溪仙、中路融人、イサムノグチ、野口謙蔵、野添平米、野村仁、ケネス・ノーランド、
コンスタンティン・ブランクーシ、松延総司、森口華弘、山口華楊、山口牧生、山﨑與嗣夫、李禹煥、
若月公平、若林奮 （五十音順）

5. ゲストアーティスト

神山清子《無題》陶器　©Kiyoko Koyama

神山清子（1936-）
信楽を拠点とする陶芸家。終戦後、信楽へ移住。描くことが好きで、それを生かせる陶器の絵付け助手、さらに 1954 年陶器製造会社に絵付工として就職。1963 年独立して本格的に作陶を始めます。1966 年に滋賀県展、市展および朝日陶芸展に入選。2021 年滋賀県文化賞を受賞。30 代半ば自宅付近で、古代窯跡から青に深い緑色が溶け込んだ自然釉の古信楽を発見、釉薬を用いない伝統的な信楽焼技法の再現を追求します。古代穴窯に倣った寸越窯（ずんごえがま）を築くと、「信楽自然釉」の再現に心血を注ぎました。2019 年 9 月から NHK で放映された「連続テレビ小説」『スカーレット』のヒロインは、神山氏を参考に設定されました。

松延総司（1988-）
熊本で生まれ、現在滋賀県甲賀市に拠点を置いて作品を制作しています。松延は、たとえば小さなドローイングをデータ上で増殖させてパターン化することでできる柄を壁紙のようにフラットに展開していく作品や、コップやトイレットペーパーなど身近にある物の輪郭をテープで縁取り、物の形を空間上に描

き出す作品など、日常生活の中で制度や構造に隠された秩序や認識をあらわにし、それらと有機的に関わる私たちの認知について問い直そうとする作品を制作しています。
出品作《私の石》は、滋賀県立美術館のリニューアルオープン記念展「Soft Territory かかかわりのあわい」で、美術館周辺に散在するように出品されたものに加え、新たに「石」を追加して展示しています。これらの白っぽい「石」は松延がセメントを丸めることで作られており、自然物の中では一際違和感を覚えます。自然によって形作られた「石」と松延が丸めたセメントの「石」。それぞれ成り立ちの異なる二つの「石」は、私たちが普段視覚でどのように物体を認識し、概念としての「石」を捉えているのか、問いかけています。

松延総司《私の石》2011 年－/セメント
©SOSHI MATSUNOBE
Photo by Kai Maetani

東加奈子(1991-)

愛媛県に生まれ、2016 年東京藝術大学先端芸術表現科を卒業しました。彼女は、人間と動植物との関係や、自然現象が社会に及ぼす影響に着目して作品を制作しています。
《Eternal beloved》は私たちの身近にある蘭についての作品です。一口に蘭といってもそこには様々な種類があり、人間によって品種改良されたものも多くあります。植物というと、つい自然を連想してしまいますが、遺伝子操作をされた植物は自然と人工の両者に掛かっているといえるでしょう。
また、《The Voice of Each Body》は、房総半島に多くの自然が残っていること、その一方で工業地帯でもあることに着目し、地層や石、残留物などその場所や大地に刻まれた記憶の声に耳を傾けようとした作品です。
どちらの作品も植物や石のように自然と結び付けられやすいものの中にある人間の営みの痕跡や記憶を描き出すことで、その境界の曖昧さを問いかけます。

東加奈子《Eternal beloved》2017 年
Single-channel video
©Azuma Kanako

6. 関連イベント

◆学芸員によるギャラリートーク ※事前申込制、先着順
開催日：2022 年 10 月 15 日(土)、11 月 12 日(土)
会　場：滋賀県立美術館　展示室3
実際に展示している作品を鑑賞しながら、展覧会を担当した学芸員が解説を行います。本展のチケットが必要です。

◆ワークショップ　たいけんびじゅつかん(子ども向け)「空気に植物を描こう」 ※事前申込制
日　時：2022 年 9 月 25 日(日) 13 時～15 時 30 分
会　場：滋賀県立美術館　ワークショップルーム、展示室3
参加費：200 円　※保護者の方は観覧料(団体料金 800 円)が必要
企画展「石と植物」を鑑賞後、細いワイヤーで植物のイメージを空気に描き作品をつくります。

◆ロビーコンサート「北村朋幹×ジョン・ケージ」（びわ湖ホール連携企画）

日　時：2022 年 10 月 8 日（土）11 時／14 時（2 回公演）

曲　目：プリペアド・ピアノのためのソナタとインターリュード（約 70 分）

会　場：滋賀県立美術館　エントランスロビー

主　催：滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール

10月9日にびわ湖ホールで公演を行う若き俊英 北村朋幹が 20 世紀のアメリカを代表する作曲家ジョン・ケージのプリペアド・ピアノ（＊）作品を演奏します。プリパレーションの様子もご覧いただけます。入場無料、事前申込不要。 ＊プリペアド・ピアノ…ピアノの弦にゴムやボルトを挟み、音色を変化させたピアノ

◆ロビーコンサート「西岡まり子×深田瑞穂」（平和堂財団芸術奨励賞受賞者によるミュージアム・コンサート）

日　時：2022 年 10 月 10 日（月・祝）11 時／14 時（2 回公演）

曲　目：ジョン・ケージ：ドリーム、ジェラール・グリゼー：石碑　ほか

会　場：滋賀県立美術館　エントランスロビー

主　催：公益財団法人平和堂財団

当館ギャラリーで開催される「平和堂財団芸術奨励賞受賞者による新進芸術家美術展」（10月4日～10日）にあわせ、同賞受賞者の西岡まり子と深田瑞穂によるパーカッションの演奏を行います。企画展「石と植物」にちなんで、サヌカイト（＊）など、様々な素材で音楽を作り上げます。入場無料、事前申込不要。　＊サヌカイト…讃岐岩朽木石

◆記念講演会「梨とため池　瀬田丘陵の魅力をさぐる」

（びわこ文化公園3館（滋賀県立美術館・滋賀県立図書館・滋賀県立埋蔵文化財センター）共同企画）

日　時：2022 年 11 月 19 日（土）14 時～15 時

講　師：横田岳人（龍谷大学　先端理工学部　准教授）

会　場：滋賀県立美術館　木のホール

美術館のおとなりにある龍谷大学から、森林生態学、自然環境保全を専門とする横田先生をお招きし、瀬田丘陵の自然を切り口としたお話をしていただきます。聴講無料、事前申込不要。

※それぞれのイベントは都合により、内容・日時等が変更になる場合があります。
イベントの詳細や最新情報は当館 HP 等で御確認ください。

7. 同時期に開催する展覧会（常設展）

郷土ゆかりの画家（油彩）
2022 年 7 月 23 日（土）～10 月 16 日（日）

信楽焼と滋賀の人間国宝たち
2022 年 10 月 18 日（火）～11 月 27 日（日）

シュウカツ！　休館中の新収蔵作品を中心に
2022 年 7 月 23 日（土）～12 月 21 日（水）

8.次回開催予定の展覧会（企画展）

川内倫子：M/E 球体の上 無限の連なり
On this sphere Endlessly interlinking
2023 年 1 月 21 日（土）～3 月 26 日（日）
※企画展の開催に合わせて、2023 年 1 月 11 日（水）から常設展でも川内倫子の特集展示を開催

9. プレス説明会

（1）開催日時　2022年9月23日（金・祝）9時～受付開始

（2）会場　滋賀県立美術館（大津市瀬田南大萱町1740－1）

（3）タイムスケジュール

9:00～　プレス受付開始

9:10～ 9:40　内覧会（展示室3）

9:45～10:15　説明会（木のホール）

※ゲストアーティスト紹介の可能性あり

10:15～　自由取材

（4）参加申込み

参加を希望される方は、返信表に必要事項を御記入の上、9月22日（木）17時までに、メールまたはファックスにてお知らせくださいますようお願いいたします。

お車でお越しの場合は、びわこ文化公園の駐車場（無料）を御利用ください。

（5）注意事項

新型コロナウイルス感染症の拡大状況によっては、プレス説明会の内容変更や開催中止となる場合があります。中止の場合は、参加申込みの際にいただいた御連絡先にお知らせいたします。

****

プレス説明会参加返信表

申込期限:9/22（木）17時

滋賀県立美術館行き

Fax　:077-543-2170
Email:museum@pref.shiga.lg.jp

＜必要事項＞

1）貴社名　：

2）御芳名　：

※参加される方すべての御芳名を記入してください。

3）参加人数:

4）ＴＥＬ　：

5）E-mail　：

6）通信欄　：

10. 広報用画像

※広報用画像の9点の作品はすべて通期展示

①岡田修二《水辺 15》2001 年
油彩、キャンバス/滋賀県立美術館蔵

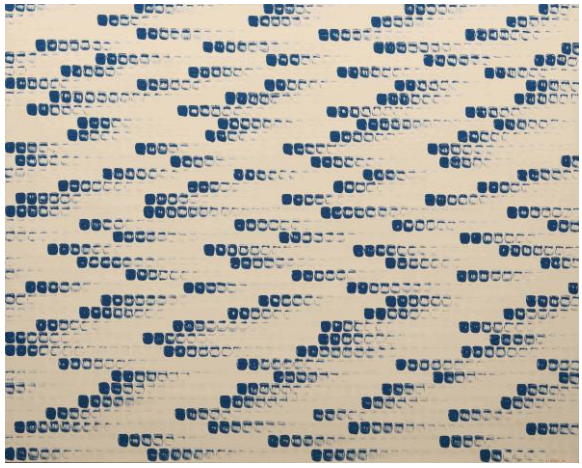
②コンスタンティン・ブランクーシ
《「世界の始まり」大理石》
1920 年
写真/滋賀県立美術館蔵

③冨田溪仙《牡丹図》1928 年
紙本著色/滋賀県立美術館蔵

④土田麦僊《まくわ瓜図　画稿》制作年不詳
紙本鉛筆淡彩/滋賀県立美術館蔵

⑤幸野楳嶺《松茸図》(部分)/制作年不詳
紙本淡彩/滋賀県立美術館蔵

⑥李禹煥《点より》1976 年
岩彩、キャンバス/滋賀県立美術館蔵



⑦東加奈子《Eternal beloved》2017 年
Single-channel video
©Azuma Kanako

⑧田中孝《Tree》1977 年
シルクスクリーン、紙/滋賀県立美術館蔵

⑨岸竹堂《四季之月図》
明治10年代(1877-1886年)
絹本著色
滋賀県立美術館蔵

広報用画像申込書

滋賀県立美術館　教育・コミュニケーション室行き
Fax:077-543-2170　　E-mail:info@shigamuseum.jp

展覧会広報用素材として、作品画像等を用意しております。御希望の方は使用条件をお読みいただき、必要事項を御記入のうえ、FAXまたはメールにてお申し込みください。

****

媒　体　名：
種　　別：テレビ　ラジオ　新聞　雑誌　フリーペーパー　ネット媒体　その他
発売・放送予定日：
御　社　名：
御担当者名：
E-mail：
TEL：
招待券希望枚数：　　枚（送付先住所：　　）

御希望の画像に✔をつけてください。

□	①岡田修二《水辺 15》2001 年/油彩、キャンバス/滋賀県立美術館蔵
□	②コンスタンティン・ブランクーシ《「世界の始まり」大理石》1920 年/写真/滋賀県立美術館蔵
□	③冨田溪仙《牡丹図》1928 年/紙本著色/滋賀県立美術館蔵
□	④土田麦僊《まくわ瓜図　画稿》制作年不詳/紙本鉛筆淡彩/滋賀県立美術館蔵
□	⑤幸野楳嶺《松茸図》(部分)/制作年不詳/紙本淡彩/滋賀県立美術館蔵
□	⑥李禹煥《点より》1976 年/岩彩、キャンバス/滋賀県立美術館蔵
□	⑦東加奈子《Eternal beloved》2017 年/Single-channel video　©Azuma Kanako
□	⑧田中孝《Tree》1977 年/シルクスクリーン、紙/滋賀県立美術館蔵
□	⑨岸竹堂《四季之月図》明治10年代(1877-1886年)/絹本著色/滋賀県立美術館蔵

****

[使用条件]

※広報用画像の掲載には、各画像のキャプションとクレジットの明記が必要です。

※当館からの指定がない限り、トリミングは御遠慮ください。作品が切れたりキャプション等の文字が画像にかぶったりしないよう、レイアウトに御配慮ください。

※情報確認のため、お手数ですが校正原稿を当館へお送りください。原稿確認を行わず誤った情報が掲載された場合、当館では責任を負いかねます。

※アーカイブのため、後日、掲載誌(紙)、URL、番組収録の DVD、CD などをお送りください。

※画像は本展の広報のみの御利用となります。御利用後は必ずデータを破棄していただくようお願いいたします。

※読者プレゼント用の招待券の提供を御希望の場合は、本申込書の記載欄に御記入ください。